

タイ・サーオ・チュントイ・ソン・オ・ベトナム？¹ ベトナムにいたおじさん，内海三八郎

JICA長期派遣専門家
川 西 一

これは、ベトナム語で、「どうして私たちはベトナムにいるのか？」という意味です。
私がベトナムに赴任したのは、平成27年10月にJICA法整備支援プロジェクトの長期専門家としてベトナムに派遣されたからですが、今はそれだけにはとどまらない運命のよ
うなものを感じています。かなり私事で恐縮ではございますが、この紙面をお借りして、
私たち家族とベトナムとの縁について、紹介させていただければと思います。



この1枚の写真をご覧ください。これは、第二次世界大戦終了後、ベトナムに残りベト
ミン²と共に戦った元日本兵の方々の写真です。今年2月末から3月初めにかけて、天皇皇
后両陛下がベトナムを御訪問され³、ベトナムに残留した元日本兵の家族と御面会されたこ
とから、ベトナム残留元日本兵について大きく報道され、そのうちのお一人である杉原剛⁴
さん(写真左端)が写っているこの写真もテレビや新聞で大きく取り上げられていました。
1945年の終戦当時、ベトナムには約9万人の日本軍がいたと言われており、その多くは日
本に帰国したのですが、杉原さんも含め、様々な事情でベトナムに残られた方も多くいっ

¹ "Tại sao chúng tôi sống ở Việt Nam?"

² フランス植民地からの独立を求め、1941年、ホー・チ・ミンが結成したベトナム独立同盟会の略称

³ 外務省ウェブサイト「天皇皇后両陛下のベトナム御訪問」参照
(http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/vietnam/visit_201702/index.html)

⁴ 杉原氏に関する報道 ウェブサイト 産経ニュース 2017.3.2 23:33
(<http://www.sankei.com/life/news/170302/lif1703020060-n1.html>)

らしゃいました⁵。彼らの中には、ベトナム人女性と結婚し家庭を持つ者もいたのですが、1954年に日本に帰国した際、家族の帯同を許されなかったことから、離れ離れとなつてしまい、ベトナムに残されたご家族がご苦勞をされたことも大きく報道されていました。

そのころ、私もハノイの自宅で、杉原さんを取り上げた日本のニュース番組を妻とともに何気なく見ていると、杉原さんのベトナム滞在時のものとして、この写真が大きく映し出されました。すると、それを見た妻が「あっ、内海のおじさんだ！」と声をあげました。妻が言うには、この写真の中央で眼鏡をかけて座っている男性は、妻の祖母の叔父にあたる内海三八郎（うつみさんぱちろう）氏だそうであり、妻が、子供のころ、ベトナムから引き揚げ長野県内に住んでいた内海氏によく遊んでもらったので、写真を見てすぐにわかったというのです。親戚に確認したところ、やはりこの人物は内海三八郎氏であり、その後ろには内海氏の妻も写っていることもわかり、妻がよく知る内海のおじさんが、歴史を映し出す写真の中にいることにただただ驚くばかりでした。

私がベトナムに赴任する前から、内海氏が随分昔にベトナムにいたことは聞いていたのですが、具体的に内海氏がいつ、どこで、何をしていたのかは、親戚も含めよくわかっておりませんでした。私がベトナムに赴任したのをきっかけに、内海氏がベトナムについて著した2冊の本⁶を入手し、同書に掲載されていた内海氏の略歴⁷を見たところ、内海氏は

1891（明治24）年 横浜に生まれる
1915（大正4）年 東京外国語大学仏語本科ならびに英語専修科卒業
1915年4月 フランス語と貿易実習のため、旧フランス領インドシナ渡航
1916年9月 神戸内田商事(株)入社
1918年～1921年 マルセーユ出張所長
1921年 エジプト外務省在日領事館、公使館勤務
1941(昭和16)年 在汕頭帝国領事館にて外務省嘱託拝命、旧フランス領インドシナ出張戦時中 軍嘱託、輸出入業に従事
戦後 ベトナム新政府⁸の要請により財政顧問として北部に残る
1952(昭和27)年 ハノイに帰還、ハイフォンにて輸出入業再開
1953(昭和28)年 サイゴンに移る
1957(昭和32)年 アメリカ経済援助局のUSC 勤務
1961(昭和36)年 鹿島建設ダニムダム建設事務所勤務
1963年 引き揚げ帰国、長野県御代田町で余生を過ごし、1986年没

という経歴を有しており、今から100年以上も前にベトナム（旧仏領インドシナ）を訪

⁵ 9万人近い日本兵のうち800人近くが帰国せず、約600人は再植民地化を図るフランスと戦ったベトミン軍などに参加したとされる。

⁶ 「南ヴェトナム風土記」（1964）鹿島研究所出版会、「ヴェトナム独立運動家 潘佩珠伝—日本・中国を駆け抜けた革命家の生涯」芙蓉書房出版（1999/03）、いずれも内海三八郎著。

⁷ 上記「ヴェトナム独立運動家 潘佩珠伝—日本・中国を駆け抜けた革命家の生涯」319頁。

⁸ 1945年9月2日に独立を宣言したベトナム民主共和国を指す。

れ、その後も、戦中、戦後の約20年間、ベトナムで暮らしていたことがわかりました。今ではハノイにも日系の大型スーパーができて便利になったとはいえ、それなりに生活で苦労することも多いのに、100年近く前に、よく知るおじさんがここベトナムで暮らしていたということに妻も大変驚いておりました。

内海氏がベトナムに滞在していた間、ベトナムでは、日本軍が1940年9月に北部仏印（旧仏領インドシナ）に、1941年7月には南部仏印に進駐し、1945年3月にフランス植民地政府を打倒（仏印処理）し単独支配をしたものの、日本のポツダム宣言受諾後の8月17日には、ベトナム独立同盟会（ベトミン）による一斉蜂起（八月革命）が起こり、9月2日にホー・チ・ミンがハノイでベトナム民主共和国の独立を宣言します。一方、ベトナム新政府は、再度の植民地支配を目論みベトナムに進出したフランスとの間で武力衝突となり、フランスとの第一次インドシナ戦争へともつれていきます。

これを重ね合わせると、内海氏は、日本軍が進駐したベトナム北部で貿易業を行っていた時に、日本の敗戦、ベトナム新政府樹立と抗仏戦争の勃発に立ち合い、何かのきっかけで、貿易商の経験を買われて抗仏戦争を行うベトナム民主共和国に関係するようになったのではないかと推測しています。

親族が100年以上も前にベトナムに来て、実際に70年近く前の写真に写っており、それがベトナムの激動の時代と重なっていることがわかると、この時代に何をしていたのだろうか、ますます強い興味が湧いてきました。内海氏については、当時の日越関係を調べられている研究者の文献でも、その存在は触れられているのですが、民間人であったことから記録も少ないようであり、研究者にとってもいわば謎の人物であることがわかりました。こうなると、一緒に写真に写っている杉原さんに聞くのが一番だろうと思い、ハノイに在住し長年残留元日本兵の調査等をされている小松みゆき様、日本ベトナム友好協会大阪府連合会小豆島様のご厚意により、小職が一時帰国した際に、杉原さんと面会する機会を得ることができました。

杉原さんから伺ったところによれば、この写真は、内海氏の妻が腹膜炎でお腹が腫れ、ベトナム南部のフランス軍支配地域に逃れるため、ハイフォンからハノイを経てタインホアに来たときに撮ったものだとわかりました。この写真をどういうきっかけで、誰が撮ったかは覚えていないそうですが、写っている人はそれぞれどなたなのか、はっきりと覚えていらっしやいました。私たち親族も気づいていなかったのですが、杉原さんによれば、内海氏は当時、語学（フランス語、ベトナム語ともに堪能）を生かして、フランス軍支配地域とベトミン支配地域を行き来していたと聞いていたそうであり、この写真には内海の娘さんもこの中に写っていることも初めてわかりました。当時、ベトミン支配地を出てフランス軍が支配する南部へ行くにはベトミンの許可が必要だったらしく、内海一家はベトミンに許可を申請してから許可がでるまでの半年間、このタインホアの村に滞在し、半年後、無事にベトミンから越境許可が出て、内海一家はカヌーに乗って村を去っていき、杉原さんは岸から手を振って見送っていただいたそうです。杉原さんと内海氏との付き合い

はこの半年間だけだったそうですが、帰国後の1972年ころ、ベトナムからの代表団が訪日した際の会合でたまたま再会し、内海氏が住む長野県の家にも遊びに行ったことがあることも初めて知りました。また、それ以来、内海氏の娘さんとも文通をしており、昨年も手紙のやり取りがあったばかりであることがわかりました。結局、内海氏が、戦後、どうして家族でベトナムに残り、何をしていたのかの詳細はわかりませんが、今から70年近く前にベトナムで内海氏本人と会い、ともに暮らしていた時の様子がよくわかり感動しました。



杉原さん（右）と筆者

このように、いろいろな偶然が重なって、ファミリーヒストリーさながらに、妻の親族のベトナムでの足跡を辿り始めたのですが、いろいろ調べていくうちに、内海氏本人だけではなく、当時ベトナムに残った元日本兵の方々、さらにそれを取りまくベトナムの近現代史にも強く惹かれてしまいました。それからは、1945年以降ベトナムで暮らしていた日本人に関する多くの資料を読んだり、その頃の日越関係や残留元日本兵のことを調べられている研究者の方ともお話する機会も頂きました。その中で、改めて、日本とベトナムの特別な縁を感じるとともに、当時のベトナムでは、皆生きるのに精一杯で日本人同士であっても互いの素性を話すことはなかったようであり、今でも語るができないことも多いことを知りました。しかし、ベトナム側の資料も不十分など、まだわかっていないことは非常に多く、ベトナムに残されたご家族のためにも調べなければならないことはまだまだ多いようです。

私は、まもなく任期を終えて日本に帰国しますが、帰国してからも、ライフワークとして、内海氏の足跡やその時代のベトナムについて調べ続けていきたいと思っています。そうすることで、いつまでもベトナムとの繋がりを持ち続けることができそうです。これも内海氏が私たちに残してくれたベトナムとの特別な縁だと感じています。